

## 平成26年度 第3回大阪府立吹田高等学校学校協議会 記録

○日 時 平成27年2月12日(木) 午後7時～午後8時45分

○場 所 大阪府立吹田高等学校 会議室(本館2F)

○テーマ ～平成26年度の総括と平成27年度に向けて～  
・平成26年度学校経営計画の達成状況と自己評価について  
・平成27年度学校経営計画(素案)について

○出席者(敬称略、委員は50音順)

会長 白井 孝雄(大阪薫英女学院中学校・高等学校校長)

委員 川辺 浩一(本校後援会会長)

高田 英克(本校PTA会長)

辻 良夫(藤が丘上自治会会長)

土井 実(鳳志会副会長)

校長 浅田 明子

○事務局

手島 肇(教頭)、植木 邦博(事務長)、磯原 健志(首席)、大西 英之(首席)

■委員から出された主な意見等

### 【平成26年度学校経営計画の達成状況と自己評価について】

- 特に自転車マナーに興味を持って3年間見てきた。通勤が自転車なので、東淀川駅の方で吹高生が自転車で走っているのを見かけるが、3年前と比べ、自転車マナーは大分良くなった、変わってきたと思う。校門の前だけではなく、3年後、5年後に無意識のうちにきっちりルールを守ることができることが保護者の立場からは良いことと思う。
- 進学クラスができ2年目になるが、来年度はよい成果があがるように頑張してほしい。どの大学に進学するかということは学校のイメージの大きなファクターとなる。進学クラスに入ればこの大学には確実にいけるという形ができれば一番と思う。こども未来専門コースについても、すばらしい幼稚園、保育園の先生が育っていくと万々歳だと思う。この2点、来年度から、また、もう少し力を入れて頑張してほしい。
- 進学クラスが設置されて2年ということで、さらにご努力いただいているということが、ひしひしと伝わり、本当に心強い限りです。特に教員の方が、講習だけではなく、3年生のカリキュラム変更というところまで、自ら一歩進んで生徒のために取り組んでいただいている。少しずつ緒について、さらに育てていくという姿勢は本当に感謝する。先生方は一所懸命やっけていただいております、それに応えるという生徒の思いが合致したときには非常に大きな結果を出すことになる。今後とも是非とも続けていただくようお願いする。

- 学校を活性化するのはクラブ活動だと思う。クラブ活動で、頑張っ、良い成績をとると、また、実績のある生徒が入ってくる。クラブ活動を支える先生方に負担がかかるのは重々承知しており、専門の先生がいるわけでもなく難しい面もあるとは思いますが、もう少しクラブ活動を頑張っほしい。
- クラブ活動について1月に初めて部員を対象にアンケートをされ、その調査結果は1年、2年、3年の平均で83%とのこと。「80%の生徒が現在のクラブ活動について肯定的」とあるが、これについては83%と高い方の数字の方がいいのではないか。
- 救急講習会に参加させてもらったが素晴らしかった。最後にみたビデオとか、なかなか感動的だったので、来年度も是非やってもらいたい。

#### 【平成27年度学校経営計画（素案）について】

- 評価指標の中で、遅刻の件数2500件以下を目標としているが、少子化の中で府立高校の定数も変化が激しく、母数の生徒数が増減すると当然遅刻件数も増減するので、遅刻指導で件数が減少したのか、生徒数減で件数が減少したのか、評価が非常にしにくい。指標についてはどのような生徒数であっても比較可能な目標値とした方がより公正な努力目標になる。
- 学校ホームページの担当は誰がやっているのですか。更新回数も含め、ホームページに何を載せるか、クリックしても上手くリンクがはれていないことも多数ある。もう少し何とかならないか、検討して欲しい。
- 昨年6月の学校協議会で、目標の年限について平成24年度から5年間を見据えたスタンスとの説明を受けた。今回の素案ではそれが大幅にリニューアルされ、初めて中期的目標のところから平成27年度から29年度と3年間の目標ということが示された。当初の平成24年度から5年間というのでは長すぎるような気がしており、それを見直して、目標の年限を3年後位にすることで、今の世の中の変化に対応した計画ができると思う。
- 地域の者としては、学校が楽しいですかという設問に7割以上の方が楽しいという回答があるのを見てほっとしている。先生方もそうかもしれないが、もっとよくなる可能性もあるので、楽しい学校をつくっていただきたい。
- 数値で表すということはわかりやすいが、一定の数値が出てきて次はそれより高くなると難しい。考え方によっては、例えば、遅刻については先生方がずっと頑張っているから3000件を維持できているともいえる。生徒指導の面で言えば、崩れだすと早いし、言い続けないと維持できないということがあり、そういう意味では、みんな同じスタンスで先生方が関わっていくということと、それを理解して動く生徒を多数派にしていくことが大事だと思う。